

地学と切手



中米エルサルバドルの
イザルコ火山切手

P. Q.

エルサルバドルの太平洋岸にあるイザルコ (IZALCO) 火山は サンタアナ火山 (標高 2,181m) の寄生火山である。この火山はその誕生に異説がつきまわっていてすでに1600年代には活動していたという説もあるが 現在では SAPPER の1770年誕生説に大体一致している。それまでは海拔約1,300m のとうもろこし畑だったという。1770年に噴気口が出来 その後2世紀の間に 1886年には1,825 m 1892年には1,885 m 1920年には1,869m 1951年には約1,900m 1953年には1,935m 1956年には1,965mと次第に成層火山が成長して 比高650mの火山となり この間噴火の絶える間はほとんどなかった。

太平洋を見下す 2,000m もの高さの円錐形の火山は 通常はおだやかなストロンボリ式噴火をくり返し その赤く輝やく光は洋上はるか遠くから眺めることが出来て 地中海におけるストロンボリ火山と同様に 中米の燈台と名付けられている。

山頂には直径約100mの火口があり ここから火山灰火山礫を噴出するが 山腹の放射状割れ目からもしばしば熔岩が流れ出ている。1926年には熱雲も発生したりした。岩質はほとんどかんらん石紫蘇輝石普通輝石玄武岩である。

イザルコから1 km ばかり北東にあつて 同じくサンタアナ火山の寄生火山であるチェロ ヴェルデ火山 (Cerro Verde 海拔 2,024m) の山頂は イザルコの噴火がもっともよく眺められる場所として観光客が多い。

図は1954年に発行された普通切手 (3c) と航空切手 (1c) 及び1935年発行の普通切手 (1c) である。

新刊紹介

地震—地震学者と地質学者との対話

本書は 昨年12月「地震を探る」と題する地震学者7名 地質学者16名とその他の参加者あわせて36名による討論会のポストプリントである。

内容は

- I部 地震学からみた地震について (論文7編)
- II部 地質学からみた地震について (論文12編)
- III部 討論会「地震を探る」

から構成されている。この本の中でとくに面白い点は 上記の話題提供のあとの質問とそのやりとり ならびに最後の総合討論で まことに臨場感にあふれている。また 昨今一般に流布されている活断層 発震機構 地震の発生機構と地質モデルの問題などの議論も興味深い。

さて地学の双壁といわれる地震学者と地質学者との対話とい

うと かつて地質調査所において行われた「関東地方の地震と地殻変動」というシンポジウムが思い出される。しかし その内容は本書の対話には遠く及ばなかったように思う。現状は本書において井尻正二氏が「東海大地震の問題がクローズアップされても 地震予知連絡会が生れても 両者はともに語ろうとせず 今日に至った」と言い切られても仕方のない状態であった。それは それぞれの学問の伝統と条件などから とかくガードを固めた 防御姿勢の討論になるのが 一般的であったからである。その点 よくもこれまで胸襟を開いた討論ができたものだと感心させられるほどの議論が 本書において展開されている。

地震に関連した学問が 開かれたものに成長するきざしを見る思いがし これから地震について学びたいと思う人 あるいは研究に参加したいと考えている多くの人々に勇気を与えてくれる本である (三梨 昂)。

杉山隆二・早川正巳・星野通平 (編) 311頁
 発行所 東海大学出版会 03-356-1541
 発行 昭和55年6月
 価格 4,000円